分水北小学校
学校だより
あおぞら
令和６年度
第　２　号
令和６年　５月２０日

広い世界へ

校長　荻野　秀和

前回の青空朝会でお話をしたことを載せます。

インドではインド象は生活に欠かせない存在だそうです。飼い慣らされた象は荷物を運ぶのに役立ち、トラックの代わりとなる存在です。トラックの代わりというより、道なき道を進むインド象はトラックより便利な存在です。子象の時からしつけをし、大きくなったらよく言うことを聞き荷物運びをする象になります。

そのしつけの中になるほどと思ったことがありました。それは象をつないでおく木についてです。子象の時は大きく太い木につなぎます。子象が逃げだそうとしても、木はその力に耐えうる太い木なので、子象はいくら逃げようとしても、逃げることができません。何日も逃げようとしますが、一向に逃げられません。やがて子象は逃げることをあきらめてしまいます。

その子象も成長し立派な大人の象になります。このとき、子象の時からのしつけが役立ちます。小さいときから木につながれると逃げられない経験を重ねた象は、大きな大人の象になっても、つなぐ木が細い木でも逃げないというのです。つながれているのは大きな象が本気で暴れて逃げ出そうすれば、いくらでも逃げることのできる細い木です。しかし、子象の時に暴れても逃げられない経験をさせていると、成長したあと、たとえつながれているのが細い木であっても逃げないとのことでした。

子どもたちには子象とは反対の経験が必要ではないでしょうか。頑張って動き出そうとしている子には木から離れ、広い世界に飛び出すことが大切です。物怖じしている子どもには、少しずつ外の世界に興味をもたせ、知らない世界があることに気づかせてやることが大切です。どの子にもまだ知らない世界を体験し、様々な経験を積んでほしいと思います。その経験を積むための場所の一つが学校です。やがて大人になったとき、さらに広い世界で活躍する子もいれば、広い世界を見た結果一つの道に打ち込む子もいるでしょう。つながれている木から抜け出す子どもたちを教え導き、たくさんの経験をさせ、大きくなったら広い世界で活躍させたり、一つのことに打ち込んだりさせることが教職員の役目だと思います。